

30代教師の転

起

きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



「授業者」である前に一人の「学習者」として考える訓練を重視した授業を目指す

広島県立尾道北高校

平山成樹先生

35歳

私が乗り越えてきたもの

授業で前を向かせるために

黒板の方を向かせ、ノートをとらせる。新卒で進路多様校に赴任した私の指導は、そこから始まりました。「前を向かんといいけん」と声を荒らげれば生徒は渋々その通りにしましたが、その表情を見て「このままでは、生徒を数学嫌いにしてしまう」と思いました。

そこで、毎回の授業で生徒による自己評価を行い、それを基に発問と説明をアレンジ。説明だけが長くならないよう、合間に一問一答形式の発問を挟むなど、授業のテンポを良くする工夫をしました。また、課題も授業を聞いていれば確実に解けるよう作問し、「分

かった」と実感させようとなりました。

少しずつ、私が何も言わなくても静かに授業を聞く生徒が増え、表情から数学への関心が感じられるようになりました。赴任6年目には、「もっと数学を学びたい」と、国公立大の数学科に進学する生徒も現れたのです。

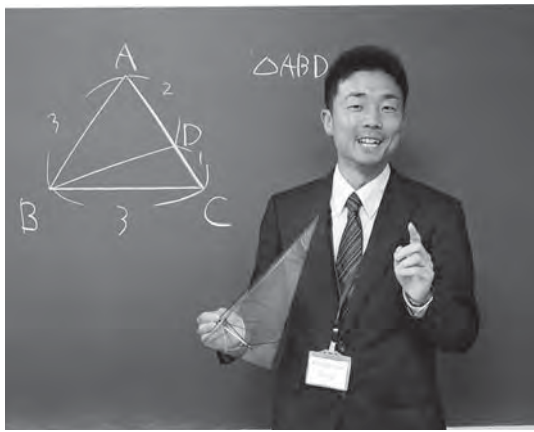
生徒を学習に向かわせられない

2校目となる尾道北高校に赴任した時は、「県内屈指の進学校で生徒の力を伸ばしたい」と意気込んでいました。そんな私に、校長は「今までの指導に頼らず、一年目だからこそ得られる気

「授業では分かるけれど、自力では問題が解けない」

付きを大切にしない」とアドバイスしてくださいました。当初はピンときませんが、私は、この言葉の意味をすぐに知ることになります。

私は授業進度が遅れないよう配慮しながら、分かりやすい授業を心掛けた。実際、生徒の表情は理解しているように見えました。ところが、確認テストや定期試験の成績は低迷。自己評価を見ると、「授業では分かるけれど、自力では問題が解けない」という生徒がいることが分かりました。分かりやすいだけの授業では、進学校の生徒を学習に向かわせられない。私は、そう痛感しました。そして、自分が前任校での指導から切り替えきれなかったことに思い至ったのです。



ひらやま・なるき ◎教職歴13年。同校に赴任して7年目。担当教科は数学。3年生担任。
広島県立尾道北高校 ◎全日制/総合学科/共学。
11年度入試では、国公立大は、北海道大、東北大、東京大、名古屋大、京都大、広島大などに計163人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ313人が合格。

そして、これからも挑み続ける目標

「分からない」と感じさせる授業

進学校の生徒を学びに向かわせる指導とはどのようなものか。この課題の答えを求めて、先輩の先生方の授業を見学しました。どの授業からも、生徒に考えさせる工夫を感じました。進路多様校では「分かる」という感覚が生徒の心を動かしませんが、進学校では生徒に「分からない」と疑問を感じさせることも、「もっと学びたい」という気持ちを生むためには必要なのです。そうした授業を行うには、生徒の志望実現に必要な学力を教師が正確に把握し、そこから逆算して日々指導する必要があると、私は、入試問題と教材

の研究を重ねました。

進学校にふさわしい難度の授業を模索する過程で、進学校の生徒は分からないことを隠そうとすることが多いことも見えてきました。つまり、生徒の「モニタリング（観察）」こそが重要であり、今まで以上に校内の試験や模試の結果に注意して目を通し、生徒一人ひとりがどこでつまづいているかを分析する必要があると気付いたので、指導を見直していった結果、生徒の成績は向上しましたが、「単に解法を覚える」「すぐに答えを求めろ」といった姿勢で学習する生徒の存在が気掛かりでした。そして、そういう生徒たちの多くは受験で結果を残せませんで

した。志望を実現したのは、試行錯誤しながら一問一問にじっくり取り組んでいた生徒だったのです。解いたことがない問題に向き合う力を付けたことが結果につながったのだと思います。考える訓練を積み重ねれば、難関大の入試問題には対応できないことを思い知らされました。「進学校の授業」を意識するあまり、いつの間にか私の指導は、生徒に考えさせることよりも、単に点を取るための効率的な学習を重視するようになっていたのです。

「授業者」である前に「学習者」として

私はもう一度、自分の指導を改めました。授業中、生徒が問題にじっくりと向き合う時間を設け、様々な道筋か

らアプローチを重ね、解答を導く力、つまり考える力を身に付けさせようとしています。そうしてこそ、数学の面白さの本質は伝えられるのです。最近「学校としてどういう力を付けさせたいのか」ということも重要な視点だと感じています。社会に出れば必ず直面する「簡単には答えを出せない問題」や「答えのない問題」に立ち向かう力を育む。それが尾道北高校の教師の使命であると気付いたので、

生徒が何を求めているかを把握し、教師がどんな力を付けさせたいかを明確にすることで、涵養すべき力である「ゴール」が見えるのです。「授業者」である前に一人の「学習者」として、生徒と共に学んでいこうと思います。

考える訓練を積み重ねる使命に気付いた

平山先生 の 授業実践



Q&A

Q 生徒に考えさせるために、課題をどう工夫していますか？

A 課題として週1~2回出す既習範囲の演習プリントを授業で活用します。演習プリントは私が添削・採点して各自に返却しますが、その際、よく考えられている解答やユニークな解き方をしている解答など、他の生徒の参考になりそうなものを、正解・不正解に関係なく別のプリントにまとめ、一緒に配付するのです。

分からないことを隠そうとするということは、周囲の目を非常に気にすることです。その分、クラスメートの解き方にも興味を示すだろうと考えました。結果として、どの生徒もプリントを食い入るように見て、自分の解き方と比較しています。自分の考えを深めることにつながると期待しています。

Q 3年間を通じて自ら学ぶ力を育むために、年次によってどのように指導を工夫していますか？

A 年次が上がるにつれ、生徒の学習の自由度を高めています。徐々に学習計画を自分で立てられるようにすることが狙いです。

1年次は毎回の授業で期限を設けて課題や小テストを出し、理解が不十分だと感じる生徒には追試を行います。2年次は、苦手だと思ふ分野を自分で選んで問題演習をさせるなど、選択する幅を設けます。3年次は更にその幅を広げ、希望者に個別指導を行います。ただし3年次でも、自立的な学習に課題がある生徒には、範囲を指定して問題演習を課しています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す平山成樹先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、平山先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp